

「Cerebral Palsy : Basic Abilities

A plan for training the pre-school child」

by

Beatrice Le Gay Brereton, M. A. Dip. Ed.

& Jennifer Sattler Diploma of Occupational Therapy

脳性小児まひ児の知覚運動機能の問題点の評価および機能改善訓練に用いられる諸テクニックがわかりやすく、実証的に証明されている本である。あげられている諸訓練は3歳半位から5歳半位までの発達レベルの児童を対象としており、CP児のみでなく一般的に就学前または低学年の児童の教育にも大いに参考となるとと思われる。

第1章においては Basic Abilities (基礎能力) の発達過程、訓練の目的方針などが次に要約されたように説明されている。

正常の5,6歳児は文字、図形、物体間の相互関係、相違点、類似点の認知を習得しはじめる。このような環境中の諸条件を認知する能力の発達の基礎となる機能が、‘基礎能力’である(一般的に‘知覚運動機能’とよばれているものと考えられる)。このような基礎能力は粗大なばくぜんとしたものから徐々に正確度を増し、4歳から5歳半位には特に次の分野における知覚認識のより正確な発達が見られる。

- ① 触覚による認識能力(触覚の種類 主体認知など)。
- ② 自己の身体的位置および部位の認識能力。
- ③ 他の物体間の距離、位置、順示関係の認識能力。

④ その場の条件に適した動作を企画する能力。

⑤ 視覚による認識能力(大きさ、重さ、形、材質、距離など)。

⑥ 視覚による選択能力(前景背景の区別)。

このような基礎能力の習得の遅延の原因は次の一つあるいはいくつかにあると考えられる。

① 経験の不足。

② 経験からの刺激の感受および認識が不明瞭。

③ 刺激を感受する器管自体の問題。

訓練のアプローチとしては

① 経験の不足に対して必要な環境づくりにより豊かな経験を与える。

② 感覚および認識の不明瞭の場合、知覚運動的経験を十分注意して企画された刺激を与えることにより習得を促通する。

③ 感覚器量の欠陥の場合、失われた機能の代償の発達を促通する。あるいは選択された刺激により失われた機能の再教育をはかる。

ここにあげられる訓練は最低3歳半位の発達レベルを必要とする。しかしそのような年少児にとっては訓練そのものを最初から行うことは不可能であり、注意深

く企画された導入および観察期間が必要とされる。

第2章から第7章までは先に記した知覚運動各分野における知覚運動機能の評価および訓練法が、一段階づつ写真や絵を十分に使って説明されている。訓練に使用される道具はほとんど手製のもので、その作り方もくわしく説明されている。

第8章には過去の諸研究の結果とあわせてこの訓練法の基礎となる理論が記されている。

Appendix 1 においては4-5歳の正常児を対象として行なった諸知覚運動分野のテストの結果が記録されており、Appendix 2 においては正常児とCP児のテストの結果が比較研究されている。いずれも特に知覚運動機能発達レベルの評価、問題点の抽出などのために非常に参考となる。

知覚運動機能訓練の手引書として役立つ本であり、この分野で著名な Ayers, Frostig, Kephart, Montessori, ほか多勢な諸先生の説、研究テスト法を広く参考として書かれた本である。

(A5判、166ページ、3000円、The Spastic Centre of New South Wales, Australia)

(国立リハビリテーション学院講師、バルガスさだ子)